

# 青山教会会報

「一番偉いのは誰か」

箴言四章二〇～二七節  
ルカによる福音書二二章二四～三〇節

牧師 増田将平

主イエスと弟子たちの最後の食事の席上で主イエスは言われました。「私を裏切る人は不幸だ」。それを聞いた弟子たちは「自分たちの中で主を裏切るのは誰か」と議論を始めました。この議論に続いて「自分たちのうちで誰が一番偉いか」という議論が始まりました。主イエスを裏切るのは、最も偉くない人ということなのでしょう。では、裏切ることなど決してしない弟子、最も偉いのは誰かという議論になったのです。弟子たちは議論好きでした。人の上に立ちたい、支配したい、そういう思いが弟子たちにありまし

た。だから議論になるのです。彼らが議論するのはこれが初めてではありません。九章にも「弟子たちの間で、自分たちのうちだれがいちばん偉いかという議論が起きた」と記されています。

「偉い」とは「大きい」という言葉です。「一番偉いのは一番大きい人、ビックな人なのです。そこでは大きな家、大きな車、大きな会社、どんな大学を出たか、年収等が人の偉さと大きさを決めるのです。私どもは「誰が一番偉いか」という話はしなくても「誰が偉くないか」という話

があります。「あの人は全然大きくない、たいしたことがない、小さな人物だ」。そして「あの人に比べれば自分はまだまだだ」と思っ、安心するのです。

ある英語の聖書は「妬み論争」という表題を付けました。妬みの心に囚われた弟子が言ったかもしれない。「どうしていつもペトロ、ヨハネ、ヤコブだけ特別扱いをされるのか」。新聞記者のある会員が政治の世界を動かしているのは妬みであって、そういう世界に自分はいざりして疲れてしまったと言われたことを思い出します。人の上に立ち、人の評価を下げ、人を支配することで自分が偉くなったかのように錯覚する。政治家だけ

の話でしょうか。いじめがあり、ハラスメントがあり、煽り運動があります。「偉い」という言葉を使わないだけで、その心は弟子たちとまったく同じであるかもしれないのです。

これらのことが起きたのは主イエスが十字架につけられる前の食事です。主イエスはどんな思いで聞いておられたのでしょうか。主イエスは「異邦人の間ではそういうことになっている」と言われま

した。「異邦人」とは「まことの神を知らない人々」のことです。神様を知らないから、上に立って人を支配しようとする。「しかし、あなたがたは異邦人ではない。父なる神を知っている。父なる神が遣わされた私を知っているだろう」。だから、

「あなたがたはそれはいけない」と言います。「しかし、わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である」。この食事で主イエスは言われました。「これは、あなたがたのために与えられる、わたしの体」「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血」

「あなたがたのために」とは、給仕する側の人の言葉です。主イエスの給仕は、体と血による給仕です。主イエスはご自身の命によって私どもにサービスしてく

ださったのです。この食事がやがて聖餐になりました。この時の弟子たちは、主イエスが仕えてくださっていることがまだよくわかっていませんでした。だから、この食事の席で議論をしたのです。

それなのに、主イエスの口から意外な言葉が続きます。「あなたがたは、わたしが種々の試練に遭ったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた」。どうということなのでしょう。この直後に弟子たちは、主イエスを捨てて逃げ去るのです。ペトロは「わたしはイエスという人を知らない」と断言します。主イエスはこの後で露呈する弟子たちの弱さを見据えつつも、それで終わりではないこと、これから始まる、弟子たちの新しい歩みをもご覧になっていたのでしょうか。弟子たちが立ち直り、再び主に従う将来を主は見ておられたのです。そのためにこそ、主はこれから十字架に向かわれるのです。さらに意外なのは、仕えることが語られた後に、支配する話になることです。仕えることと支配することは矛盾するようには思います。

しかしながら教会改革者ルターは次のように言いました。

自由な君主であって、誰にも服しない

「キリスト者はすべての者に仕える僕（奴隷）であって誰にでも服する」

君主であり、同時に僕であるという不思議な矛盾の中を生きているのがキリスト者なのです。さらにルターは言います。「愛とは、愛している者に仕え、服することである」

主イエスが弟子たちに言った言葉、「しかし、あなたがたはそれはいけない」とも訳せます。「そのような者であるはずがない」というのです。

これから努力してこういう人にならないければならないという話ではありません。「すでに、あなたがたは異邦人とは違う存在になっている。異邦人の王に負けなない、偉い存在になっている」と言われたのです。主イエスによると偉いとは、若者のように仕えることができるということです。使徒言行録に記された話です。教会で人が亡くなりました。すると若者たちが立ち上がって、死体を包み、運び出して葬りました。誰かに命じられてではなく、当然のこととして務めを果たしたのです。主イエスは「あなたがたは、若くなくても、若者のように仕えること

ができる」と言われます。

明治の頃、高知教会に片岡健吉という人がいました。この人は衆議院議長でした。日曜日になると大勢の人たちが礼拝に来る。片岡さんは、下駄箱に靴を並べる下足番をしていた。ある人が高知教会に来て、片岡先生はどこですかと会員に聞いたところ「ああ、玄関で下足番をしている人ですよ」と言われて驚いたそうです。この人は長老でもありません。ある人から衆議院選挙の妨げになるから長老を辞退してはどうかと勧められると「衆議院議長となるより、教会の長老でありたい」と答えたそうです。「偉さ」「大きさ」のこだわりから全く自由でした。キリストに救われて、仕える自由を与えられたからです。キリストは私どもに自由をくださいます。この自由の中で、誰でも、若者となり仕えあい、愛し合うことができますのです。

(三月三十一日主日礼拝説教要旨)

